

2 地域の現状

本町は北海道渡島半島の北部に位置し、道南の拠点都市函館市と道内有数の重工業都市室蘭市の間に位置します。

東は太平洋岸にある噴火湾(別名 内浦湾)、西は日本海に面し、日本の市町村で唯一、2つの海をもつ町です。北は長万部町、今金町、せたな町、南は森町、厚沢部町、乙部町と接しています。面積は約 956km²で渡島総合振興局管内最大です。

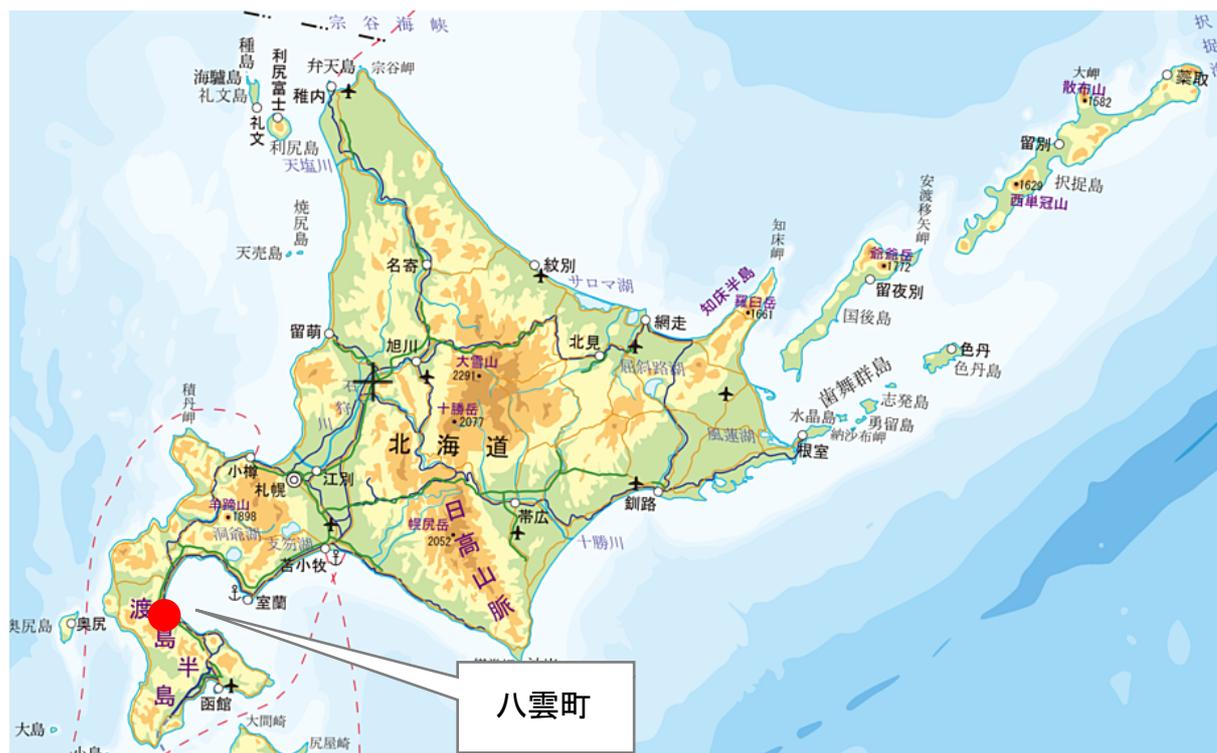


図 2-1 八雲町の位置

2.1 地理的特色

2.1.1 地形

本町は、渡島半島のほぼ中央部を占める広大な面積を有しています。

標高 800~900m 級以上の山々が南北を連ねる渡島山系を挟んで、東は遊楽部川、落部川、野田追川が流れ、下流へ向かって丘陵地や低地が形成されています。流域は肥沃な農耕地、丘陵地は畑や牧場地帯となっています。西は相沼内川、見市川が流れ、海岸線近くまで山地が迫り、平坦地の少ない地形となっています。

2.1.2 交通体系

国道は3路線があり、①函館市と札幌を結ぶ国道5号、②渡島半島を横断し、太平洋と日本海を最短距離で結ぶ国道277号、③日本海側を国道229号が走り、北海道の大動脈となっています。

高速道路は、道央自動車道の整備が進み、平成18(2006)年11月に八雲インターチェンジが、平成21(2009)年10月には落部インターチェンジが完成し、道央圏とのアクセスが大きく前進しました。

鉄道は、JR函館本線が国道5号と並行して通り、青函トンネルによってダイレクトに本州と結ばれています。

令和12(2030)年度末、北海道新幹線が札幌まで延伸する予定です。函館-札幌間の駅の一つとして、本町市街地から西に約3kmの酪農地域に、北海道新幹線新八雲(仮称)駅が建設される整備計画となっています。周辺は、本町の基幹産業の一つである酪農を支える地域であることから、その状況を保全・維持していくことが重要です。

「北海道新幹線新八雲(仮称)駅周辺整備基本計画」(平成31年3月)では、基本理念を“周辺の風景に調和した「牧場の中にある駅」”としています。現状の牧歌的風景を売りに出来る土地利用を目指すため、農村景観を保全する周辺整備を行い、宅地化や商業地化などの開発は抑制する方針です。

周辺整備の課題の一つとして、家畜ふん尿による臭気が挙げられます。新駅の開業に向けて、臭気低減を含めた環境整備が課題となっています。

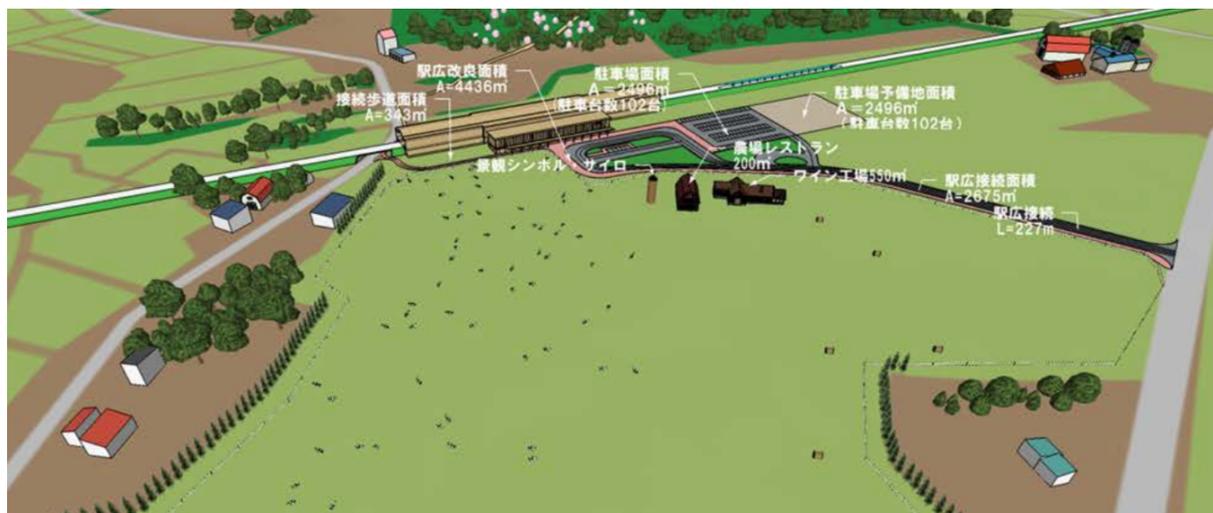


図2-2 北海道新幹線新八雲(仮称)駅整備イメージ図

出典：北海道新幹線新八雲(駅)周辺整備基本計画

2.2 社会的特色

本町は、平成 17(2005)年 10 月、渡島山系を挟んで隣り合っていた渡島管内旧八雲町と桧山管内旧熊石町が新設合併し、誕生した町です。

2.2.1 旧八雲町

旧八雲町は、徳川御三家の一つ、尾張徳川家(旧尾張藩)の 17 代当主徳川慶勝公が開墾と併せて旧藩士たちの授産のため、遊樂部の土地の下付を願い出て、明治 11(1878)年、家族持 15 戸、単身者 10 名、総人員 82 名を移住させたことから本格的に農地化が進められました。これが旧八雲町の組織的団体移住のはじまりでした。

その後年々移住する戸数が増加して、明治 14(1881)年黒岩とともに独立して八雲村となりました。「八雲」という名は、徳川慶勝公が、豊かで平和な理想郷建設を願い、古事記所載の日本最古の和歌である須佐之男命(スサノオノミコト)が読んだ「八雲立つ 出雲八重垣妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」を引いて名付けました。

その後国道の開通により、役場をはじめ各施設機関がしだいに山越内村から八雲村に移り、明治 35(1902)年北海道 2 級町村制施行により両村が併合して八雲村となりました。明治 40(1907)年 1 級町村制施行となり、7 月現在地に役場庁舎を新築移転しました(当時の人口 10,565 人・戸数 2,103 戸)。明治 44(1911)年雲石(八雲～熊石間)、太櫓の二殖民道路の開通や産業の進展に伴い、町村制施行に対する住民の世論も高まり、大正 8(1919)年に待望の町村制施行となりました。昭和 32(1957)年には落部村との合併が実現しました。

2.2.2 旧熊石町

熊石は、アイヌ語の「クマウシ」で「魚を乾かす竿のあるところ」という意味から名付けられたといわれ、恵み豊かな日本海に抱かれて古くから漁業が栄えてきました。

旧熊石町のはじまりは、鎌倉時代後期の永仁 4(1296)年に日蓮上人の六老僧の一人、日持上人がこの地に足跡を残した時を持って定められています。

元禄 4(1691)年には和人地蝦夷地の境界地として番所が相沼から熊石に移され、当時の日本国最北の地となりましたが、寛保元(1741)年に松前大島の噴火があり、村損壊の危機にさらされました。しかし、永享元(1744)年頃から再び有力者の移住により新たな村づくりが進められ、漁場の拡大等によりニシンの千石場所として再び繁栄す



写真 2-1

八雲町開墾の祖 徳川慶勝公

出典：徳川林政史研究所

るようになりました。

明治 6(1873)年戸長、副戸長制度により熊石、泊川、相沼の 3 村に戸長が任命されました。明治 35(1902)年には北海道二級町村制が改正公布され、新しく熊石村として発足となりました。明治 20 年代頃まで村の産業経済の中心であったニシン漁は明治 30 年代以降不漁の年が多く、地域活力も低迷を辿り、大正時代にはニシン漁は皆無となったため、イカ漁、イワシ漁等への転換が行われました。

昭和 35(1960)年、有史以来最も多くの 1 万人を超える人口となり、昭和 37(1962)年には町制施行、高齢化や過疎化が進む中で、地域活性化のために農漁業の基盤整備や平地区の開発等が進められてきました。

2.3 経済的特色

2.3.1 産業別人口

平成 27(2015)年国勢調査における本町の産業別就業人口は、第 1 次産業が 1,773 人(21%)、第 2 次産業が 1,625 人(19%)、第 3 次産業が 5,132 人(60%)となっており、就業人口は、いずれの産業も減少傾向に推移しています。

第 1 次産業の内訳は、農業が 705 人(8.2%)、林業が 103 人(1.2%)、漁業が 965 人(11.3%)と、農漁業が第 1 次産業の 9 割以上を占めています。

2.3.2 農業

本町の農業地帯は大きく八雲地域、落部地区、熊石地域に分けられています。

八雲地域は、海霧を伴うヤマセなどの気象条件や、火山性土壌であることから、冷涼な気候に適した酪農を基幹としています。平成 30(2018)年の農業総生産額 約 87.1 億円のうち、乳用牛が約 47.9 億円と 5 割以上を占めます。

平成 30(2018)年の牛の飼養戸数と飼養頭数は、乳用牛が 99 戸・10,432 頭です。また、肉用牛は、24 戸・2,080 頭です。

落部地区は水稻(もち米団地)と軟白ネギ・花きなどとの複合経営、熊石地域は野菜を中心に経営されています。

表 2-1 農業生産額（単位：百万円）

年	H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)
農業総生産額	6,786	6,497	6,719	7,090	8,172	8,272	8,706
耕種計	1,076	922	1,052	1,127	1,041	1,080	1,043
米	334	267	315	361	314	309	298
雑穀・麦・豆類	86	42	58	79	34	38	22
いも類	168	158	165	172	180	178	171
野菜類	375	336	381	386	414	453	452
その他作物	113	119	133	129	99	102	100
畜産計	5,710	5,575	5,667	5,963	7,131	7,192	7,663
乳用牛	3,922	3,924	4,211	4,260	4,703	4,715	4,795
肉用牛	475	624	838	1,050	1,262	1,071	1,316
豚	1,299	1,013	607	640	1,143	1,378	1,502
鶏	13	13	11	10	15	16	17
その他畜産	1	1	—	3	8	12	33

—：該当数値のないもの

出典：八雲町農林課

2.3.3 水産業

水産業は、海岸線が太平洋側 32 km、日本海側 20 kmと恵まれた環境にあり、農業と並んで本町の基幹産業となっています。

太平洋側の八雲地域ではホタテ養殖漁業を主体として、サケ定置、カレイ等刺網、コンブ等の採操業、ホッキ栴びき等が行われています。平成 30(2018)年度の水揚高は約 75.5 億円、そのうちホタテ養殖が約 60.2 億円と 8 割近くを占めています。

日本海側の熊石地域ではスケトウダラ、イカ漁を主体とし、アワビ養殖漁業等が行われています。平成 30(2018)年度の水揚高は約 1.6 億円です。熊石地域には、道内で唯一エゾアワビの人工種苗生産を行う北海道栽培漁業振興公社熊石事業所と、ここから供給される種苗を中間育成する八雲町熊石水産種苗生産センターがあります。種苗生産から漁業者による海中養殖まで、一貫した生産体制が整っています。

2.3.4 林業

本町の森林面積は平成29年に80,236haであり、私有林が31.5%、町有林が6.2%、国有林が62.4%です。森林全体の樹種別面積の約26%が針葉樹、約74%が広葉樹です。

表 2-2 森林面積の保有者形態別割合および樹種別割合(平成29年)

所有者	森林面積 (ha)				計	蓄積 (千m ³)			人工林率 (%)
	天然林	人工林	無立木地	その他		針葉樹	広葉樹	計	
森林管理局所管国有林	39,850	8,208	—	1,992	50,049	1,142	3,239	4,380	16.4%
その他国有林	2	—	—	—	2	0	0	0	—
道有林	—	—	—	—	—	—	—	—	—
町有林	3,169	1,520	202	—	4,981	273	314	587	30.5%
私有林等	15,250	9,170	874	—	25,293	1,968	1,493	3,461	36.3%
計	58,271	18,898	1,075	1,992	80,236	3,384	5,045	8,429	23.6%

—: 該当数値のないもの

出典: 北海道林業統計(平成29年度)

2.3.5 商業

平成26(2014)年における事業所数は193箇所、従業者数は969人、年間商品販売額は267億8,543万円です。八雲町市街地は太平洋側に位置し、JR八雲駅を中心に半径1.5kmに形成されており、商業施設や医療施設などが歩いていける範囲にあります。スーパー、ホームセンター、医療機関などが充実しており、近隣町村における商業圏、医療圏の中心になっています。

2.3.6 工業(製造業)

本町の平成28(2016)年における事業所数(従業者4人以上)は25事業所、従業員数は647人であり、年間製造品出荷額等は258億6,459万円です。

基幹産業である農業、水産業に関連した食品製造業が中心となっており、平成28年の年間製造品出荷額の9割以上を占めています。主要な事業所は水産加工業、食肉処理加工業にみられます。

そのほかの主要な事業所として、木材製造業及び船舶製造業などがあります。

また、熊石地域における海洋深層水は、漁業分野のみならず、食塩や水産加工品、味噌などの原材料としても利用されており、地域資源が産業振興に活用されています。